

人びとが創るもうひとつのアジア

ハリーナ

HALINA

no.53 2024年8月

【特集】

東西ティモール

二つの「国家」で生きる人びと

東西ティモール 二つの「国家」で 生きる人びと

ティモール島は東西の長さが約480km、オーストラリア大陸の北方に浮かぶ一つの島ですが、二つの国家が存在しています。島の東側は2002年5月20日に主権回復を果たした東ティモール、西側はインドネシアの一部となっています。植民地時代に島に引かれた線が引き継がれて国境となり、両側を別々の国家として分けています。しかし、そこに生きる人びとはどうでしょうか。今号では、「東西ティモールのいま」を人びとの暮らしから見つめてみました。(編集部)



新しくなり、すっかり規模が大きくなったナバン検問所一帯の様子。写真右奥、オエクシ側でも工事が進められていた(森田良成氏撮影/2024年)。



新しくなり、すっかり規模が大きくなったナバン検問所一帯の様子。写真右奥、オエクシ側でも工事が進められていた(森田良成氏撮影/2024年)。

ティモール島にも西はある —インドネシアの「難民」の20年—

堀江正伸 / ほりえ まさのぶ
青山学院大学地球社会共生学部

ティモール島との出会い

仕事や研究で「ティモールへ行く」と言うと、大抵の場合、

東ティモール民主共和国へ行くのだと思われる。しかし筆者が研究のフィールドとしているのは、東ティモールではなく「西」

ティモールである。東ティモールはその名の通りティモール島の東側で、西側はインドネシアの東ヌサトゥンガラ(NTT)州の一部である。筆者が西ティモールへ初めて行ったのは、2005年6月のことであった。当時は、国連機関に勤務し人道支援に従事していた。つまり、西ティモールは、

人道支援が必要とされるような場所であったのである。筆者が担当していた支援の対象には、その数年前に東ティモールから西ティモールへ国境を越えて避難してきた人びとも含まれていた。それから20数年の時が流れた。流れた筆者は、避

難民の20余年がどのようなものであったかを理解しようという調査を行っている。ティモール島は14世紀の中国やジャワの記録に登場する。その後やって来たポルトガルとオランダは、島を巡って戦いを繰り返した。ティモール島の人びとの多くがカトリックかプロテスタントを信仰しているのはその影響である。1859年に両国がリスボン条約を締結し境界を定めることで戦いが終結、数度の変更を経て1916年に最終的に合意された境界が今日のインドネシアと東ティモールの国境である。

その後1942年にティモール島全土に日本軍が侵攻したことにより境界は消滅するが、1945年に日本軍が撤退すると再び、インドネシア(西側)／ポルトガル(東側)国境として出現する。ところが1975年にインドネシアが東側へ侵攻したことにより、再び国境は消滅する。このようにティモール島の西側と東側の境界や国境は出現、消滅を繰り返してきたが、1999年に東テ

パへ パパがいないのがさびしいからこれからもしごとをがんばって早く帰ってきてね」

ン社とAPLAに大変お世話になってきたからである。恩返しする機会がやってきたと思った

日中は教育と大学運営(委員の仕事など)が主な仕事となり、研究は子どもたちが寝静まってからという生活をおくっている。そこに市民活動が加わるようになった。しかし、忙しさという点ではあまり問題ないと思っ

たグローバル商品のサプライチェーンのあり方を考える研究を行っている。教育では、APLAとカカオキタ社のお世話になりながら、パパアのカカオ生産地に学生たちを引率し、民衆交易について学ばせてもらっている。そして、学園祭では民衆交易のカカオを使った飲食物を提供する出店を学生たちと企画し、民衆交易の商品および活動について広報する予定である。このように研究・教育とAPLAの

相乗効果を生み出すかである。子どもたちと学生が交流できるようにBBQなどのイベントを企画したり、卒業式の日には家族みんなで大学を訪問し、お祝いし、「また今度会ったときには、子どもたちに『大きくなったね』と言ってあげてほしい」と声をかけたりしている。子どもたちが大きくなったら、インドネシアの調査村やパパアに連れて行ってあげたい。ただ子どもたちはまだ8歳、5歳、3歳。今はもっとパパと一緒に遊びたい年頃である。なかなかパパとの時間を増やすのは難しいが、せめて子どもたちと一緒にいられる時間は、目いっぱい楽しい時間にしてあげたいと原稿を書きながら改めて思うのであった。■

RELAY ESSAY ぽこぽこ poco-poco..... 53

研究者・教育者・市民・パパ であることのバランス

寺内大左 / てらうち だいすけ
筑波大学准教授



活動は重なり合っており、うまく相乗効果を生み出すことができるのではなにかと思っ

課題は、パパとしての活動と研究、教育、市民活動とをどう重ね合わせ、

Contents

- 02 【ぽこぽこ 53】
研究者・教育者・市民・パパであることのバランス
◎寺内大左
- 03 【特集】
東西ティモール
二つの「国家」で生きる人びと
ティモール島にも西はある
—インドネシアの「難民」の20年
◎堀江正伸
ママと「ねずみの道」の物語
—オエクシ国境地帯の人びとの暮らし
◎森田良成
24年ぶりの帰郷
—ティモール島中部の「家族」の暮らし
◎松村多悠子
石油基金への依存が続く東ティモール、国内産業の発展に大きな課題
- 09 【COLUMN】
【西ティモール見聞録④】
蜂にまつわる小話
◎松村多悠子
【APLAの本棚④】
安藤文将著
『香港を耕す—農による自由と民主化運動』他
- 10 【Topics】
01- インドネシア大統領選挙
—民主主義の後退か?
◎津留匠子
02- インドネシア・パプア州を訪問して
—筑波大学・国際総合学類の海外研修に参加した皆さんに聞く
◎野川未央
- 12 【PtoP*最前線】
減少するブラックタイガー
—稚エビ減少に直面する産地の対応◎黒岩竜太
- 14 【Voice from APLA partners】
代表理事からのご挨拶
- 15 事務局だより
- 16 【揃っておきアジア】
台湾
◎吉澤真満子

表紙のことば

インドネシア政府奨学金を得てスマトラ島の南の端、ランブンの国立大学に留学していたことがあります。「語学の勉強以外に何か地元の手工芸を学びたい」と大学側に相談するも、ジャワの踊りサークルなどはあるのに、ランブン独自のものとなるとなかなか見つかりませんでした。ある日、写真で見かけたタンバンという布を探しに、一人で州都からバスに2時間ほど揺られ南海岸の村に行きました。そこに住む人たちがタンバンを作っていたと聞き、探し回ったものの、見つからず。結局、留学ももうじき終了という頃に州都の市場を探し回り、ケースの隅で埃を被った布を1枚見つけました。これがその時の布です。霊船文様が織り込まれています。後から知ることになるのですが、ランブンはジャワ人の移住政策が最初に行われた土地で、2022年のデータによると62%がジャワ人、先住民は25%ほどだったのです。(松村多悠子)

イモール独立を問う住民投票が行われるまでに境界が存在していたのは合計56年だけであった。

東ティモール独立と避難民

国際連合は1999年に実施された住民投票を支援するために平和維持活動を行ったのを皮切りに、2012年まで5つの平和維持活動を展開した。平和維持活動の他にも、国連関係機関や二国間支援機関による支援も行われ、一連の国際社会による東ティモール支援は、冷戦後に登場した平和構築の概念、つまり統治や治安制度の構築や開発、人道支援を含む包括的支援を实体化したものであった。

一方の西側に目を転じてみると、国際的な支援は筆者が担当していたものも含めてわずかしが行われてこなかった。西側はインドネシアの領土であるため、開発や福祉はインドネシア政府の責任ということになる。しかし、当時の西側の開発状況をさまざまな指数で見ても、東側より優位であったとは言いがたかった。それどころか冒頭で紹介したとおり、人道支援すら必要な状況であったのである。

東側での住民投票の結果80パーセントに近い人びとが独立を支持し東ティモールの独立が決定すると、約30万人が東側から西側へ避難した。筆者は、当時の彼らの状況についても聞き取りをしているが、移動時に家族が離れ離れになった経験を語る人は多い。また西ティモールの住人にも避難民の生活状況、特に食糧、医療、衛生状況の惨状を記憶している人びとがいる。国連の難民支援、保護機関である国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）も支援を行っているが、西側住民の多くも元から支援を必要としているような状況下で避難民だけを支援することが難しかった。そのため、支援は避難民の東側への帰還支援が主になり、その結果、約20万人が東側へ帰還した。

冒頭で紹介したとおり、筆者は西側に残った約10万人がどのように生活を築いてきたのかを調査している。一般的に帰らなかった理由としては、東ティモールの独立に反対していたから、インドネシアを支持する民兵として活動していたから、またその家族だからなどが挙げられる。本来は帰りたかったのだが、元

述できなかったが、物品の往来などの商業的なやりとりも合法的、非合法的に行われている。



B村の避難民が独自に拓いた定住地。

民兵でもある村の有力者に帰ることを妨げられたというケースもある。理由はともかく、結果的には約10万人が、難民としての支援を受けることなく、自助努力で生活の基盤を築くことになったのである。

現在の避難民

元避難民が多く住むA村では、国境からわずか30mのところにも元避難民の家が建っている。A村で元避難民の家が建つ土地は2001年に村役場から割り振られたものとのことだが、農業用の土地は割り振られていない。A村でいつも話を聞かせてくれる60代のX氏も、農業で生計を立てているものの農地を所有していない。そこで農地について詳しく話を聞いてみると、国境の向こう側、つまり東ティモール側にあるという。端的に言えば外国にある農地を毎日耕作し、農作物を収穫し西側へ運んでいるというのだ。この話を聞いた筆者は、土地の所有者との間に問題は生じないのか、また入国管理法に違反しているのではという疑問を抱いた。

X氏の説明によれば、ティモールの農地はインドネシア語で「国際社会のティモールへの注目は、一国の独立という大きな事象に集中し、ティモール島はインドネシアや東ティモールであったことを考えずにきたのではないだろうか。ティモール島を一つのティモール島として見直してみると、植民地政策、国内・国際政治などにより移りゆく条件のなか、独自の伝統を脈々と受け継ぎながら生きるしなやかで逞しいティモール人の姿が明らかにるのである。」

ママと「ねずみの道」の物語

——オエクシ国境地帯の人びとの暮らし

森田良成 / もりた・よしなり
桃山学院大学国際教養学部

東

ティモール民主共和国のオエクシ県は、島の「西」ティモール側に位置している。そこは東ティモールの他の領土から切り離されて、周囲をインドネシア領に囲まれた「飛び地」である。東ティモールとインドネシアとの国境は、16世紀はじめにティモール島にやってきたポルトガ

ルトと、それに遅れてきたオランダとが争い、20世紀に設定された境界線を引き継いでいる。ポルトガルは、初めて上陸した土地であるオエクシを、1769年にティオリに拠点を移してからも手放さなかった。オエクシを囲む現在の国境線は、こうした島の歴史を反映している。しかしそれは、この地域に暮らす人

アダットと呼ばれる慣習法に基づいて人びとが管理していることだ。先祖からの決まりに則って引き継がれた土地は、X氏がどこへ行こうとX氏に使用する「権利」があるという。近代的な法に基づいた登記制度によって土地所有をしているわけではないが、東側の住民もX氏はその土地を使用することを当然と考えているようだ。また、X氏はアダットに則った儀礼や祭事に出席する際には、東側へ行くという。しかし、X氏はパスポートを保有していない。X氏は、日々の農作業や儀礼に参加する際、枯れかけた川を渡り山中へと続く道を歩いて国境を越えるのである。さらに聞き取りを進めていくと、X氏はかつて住んでいた集落で、アダットを管理する立場にいたという。つまり、その集落ではX氏の渡航なしに儀礼や祭事を行うことができないのである。そんなX氏が西側に留まった理由を尋ねると、経済的な理由、つまり西側に留まった方が貧しいながらも将来的な経済的機会に恵まれると考えたからだそうだ。現在X氏は、インドネシアのカリマンタン島にあるアブラヤシ農園

で出稼ぎをしている二人の息子から仕送りを受け取っている。B村の様子も簡単に紹介したい。B村の人びとは、インドネシア政府とUNHCRが2005年に整備した定住地に入植した。しかし、入植して程なくして地主が現れ定住地を追い出されたという。そこで、なぜそのような場所に定住地が作られたかという疑問が湧くが、西側でも土地はアダットによって管理されており、定住地建設にあたってアダット上の地主との折衝がうまく行われておらず、避難民入植後に問題となったのである。

幸い近隣のB村の地主が元避難民に土地を貸してくれたため、元避難民たちは自主的にB村に定住地を作ったと説明してくれた。現在では、元避難民がB村の地主の農地で働きつつ積み立てた資金で地主より土地を買い上げたため、土地問題は解消されているようだ。また元避難民は、共同出資で農地も購入している。B村の住民たちも、A村の住人と同様、アダットによる儀礼が行われる際には東側へ渡る。A村の事例のように、不法に森の中にできた道を歩いて国

たので、そのまま留まるのは危険でもあった。こうしてママは、一時的な避難のためではなく、インドネシア側で新しい生活を送るためにオエクシを離れた。まもなくママは、その商才を発揮するようになった。オエクシの国境警備のために国連平和維持軍がやってくると、ケファで安く手に入る商品がいい値段で彼らに売れることを知った。

ママは、腕時計、タバコ、香水などをせっせと運ぶようになったという。ただし、国境のインドネシア側で警備しているインドネシア軍兵士に見つかるわけにはいかない。「あの頃のインドネシア兵はずいぶん厳しかったから」、せっかくの商品を没収され、罰せられてしまう。だからママは、下着の上下に品物を隠して運んだ。インドネシア兵は捕まえた者の体を調べるが、女性の下着の中までは手を出さず、腕時計を運ぶとき、ママは左右10個ずつをパンツに隠して足を通し、さらにゆつたりしたワンピース状の服を着るようになっていたという。

当時、オエクシ側の国境警備はヨルダンの兵士が担当していた。ママは彼らと顔なじみにな

24年ぶりの帰郷

—ティモール島中央部の「家族」の暮らし

松村多悠子／まつむら・たゆこ
APLA事務局

「Tおじさんの24年ぶりの里帰りに付き合うから。来週、そっちに行く」。

2024年5月。東ティモールに滞在していた私にインドネシア領西ティモールのアタンブアにいるパートナーから電話がかかってきた。以前からおじさんが「儀礼で東ティモールに戻るから2人も一緒に来るか」と誘ってくれていた件だ。すでに東ティモール・エルメラ県からおじさんの妹夫婦が国境を越え、アタンブアまで迎えに行く道中で、おじさんも急いで休暇の申請などしているという。東ティモール独立の是非を問う住民投票が実施された1999年、おじさんと一族の多くは西側へ避難した。その後、一部は「国境」となった境を越えて東側に戻り、おじさんは西ティモールで生きていくことにした。インドネシア国籍だ。

翌週、私たちはタシトルで出会った。タシトルは首都ディリの西端に位置するエリアで、現在立ち退き問題に揺れている。地方から首都に仕事を求めやってきた人たちが簡素な家を建て住み着いてしまっているのだ。おじさんの一族も何人かが地方の山からやって来ており、私とパートナーは家々を一緒に周り、約四半世紀ぶりの再会に立ち会った。おじさんが家に入る前には、濡らしたキンマの葉で水を散らして清め、肩に黒いタイス（織物）が掛けられた。ケマック人のタイスだ。おじさんは皆と肩を抱き合い、笑顔を見せた。初めて会う子どもたちもおじさんの近くに集まり丁寧に挨拶をした。おじさんは故郷エルメラ県アッサベのとある氏族の長だ。

2日後、おじさん一族と私たちはディリからアッサベに向けてピックアップトラックとバイクで出発した。乾季入りしているとはいえ山間部は雨も降る。何度もトラックから降りロープでトラックをひっぱり、悪路を進むこと（グーグル・マップによれば4時間のところ）約10時間。到着は夜10時を過ぎていたが、私たちは氏族の家へ向かった。隣には崩れた家の基礎があった。ここでもキンマの葉で水を散らし清め、おじさんが中へと迎え入れられた。タシトルと同様の光景だったが、もっと多くの人が集い、そしておじさんの顔は笑顔なのか泣き顔なのかかわからないほどぐしゃぐしゃになっていた。私たち2人も中に入り、おじさんが「アタンブアの私の子だ」と紹介してくれた。中央におじさん、周りに年長者が座り、ケマック語で話が続けられた。1999年以前のこと、その後のこと、そしてこれからのこと。おじさんの甥がインドネシア語でこう説明してくれた、「おじさんの24年ぶりの帰郷をみんな心待ちにしていた。1999年、インドネシア軍によって私たちの“神聖な家”が焼かれたが（隣の崩れた家の基礎がそれ）、氏族の長であるおじさんの不在のため再建されずにいた。“神聖な品”もおじさんと共にある。今回の帰郷は、“神聖な家”の再建に向けてのもの。でも、その前に話されなくてはいけないことがある」。

1999年以來、東ティモールに足を踏み入れなかったお

じさん。強面で口下手なおじさんが詳しく語ったことはないが、その理由は想像にかたくない。容易ではない辛辣な場面を覚悟していたのだが、実際のところは緊張の雰囲気こそあれど、皆が喜び涙を流しおじさんを迎えた。甥が長老の言葉を訳した。「Tはこの村で何も間違いを犯していない。Tはいつだって戻ってこられる、何も問題はないのだ。もう故郷に戻ってくるべきだ」。甥がさらにこう続けた。「おじさんはここで何も悪いことをしていない。おじさんはインドネシア占領期に公務員になった。だから併合派にならざるを得なかっただろう。でもそういう状況で得たお金や食べ物はこの故郷の村で分け与えた。何度も何度も。氏族の皆を支えた」。

Tおじさんは1960年、アッサベに生まれ、ポルトガル時代にも教育を受けたが困難な時代のなかで学業が続けられなかった。1975年にはインドネシア軍による侵攻があり、他の多くの人同様おじさんも山に逃げて3年間を過ごした。その後、歳をごまかし小学校の途中から学業を再開した。そうして学び、ディリで野菜を売る商売をし、公務員試験を受け、公務員となった。1999年に西ティモールに逃れた後も公務員の地位が保たれ、ティモール島の西端の都市クパンでの役職を用意されたが、「なるべく遠くに行きたくない」と国境の町アタンブアで公務員として働き一家を養っている。これからは“神聖な家”の再建のために頻繁に国境を越え、東ティモールを訪ねることになる。旅の最後、エルメラ県グレンノの町で分かれることになった。ちょうど訪ねてきた親族と再会を喜び合うおじさんに「またアタンブアでね。私たちはすぐに会える」と別れを告げると「私たちは引き離されてはいけない、どこにいたとしても」と言った。

西ティモールには、東ティモール元避難民が多く暮らす。ティモール島の西端のクパン市近辺には東ティモール東部地域の人びとが船や飛行機で直接逃れ、言葉も文化も大きく違う環境での生活となった。ところが東ティモール西部地域・国境地帯では状況が異なる。植民地時代に引かれた線のあちら側とこちら側を越えて文化的なつながりが強く、親族関係が広がっている。事実、1999年の騒乱時には多くの避難民が西ティモール側国境地帯の親族関係を頼りにした。こうした背景から、ティモール島東西国境地帯の人びとは慣習行事や単純に親族に会うなどのために今でも当たり前国境を越え行き来している、ときに正規の方法で、ときに「ねずみの道」を通して。



アッサベの山を背にする“神聖な家”の跡。到着翌日、「火消し」または「冷やす」という意味合いの儀礼が行われた。

ないんだから、ぱっと入ることができない。大事なことは、しっかりと警戒すること」だという。オエクシ国境地帯のヒトとモ

ノの動きは、東ティモールの独立から現在までに、めまぐるしく変化してきた。東ティモールだけを見て隣接する西ティモ

ルとの関係を考えないでいると、独立の美談だけにはとても収まらない、もっと複雑な個人の事情や生き様を見落とすことにな

るだろう。国境のそばで暮らすママのような人たちは、二つの国家との関係を巧みに調整しながら、自分たちにとって望まし

い生活をしたたかに、たくましくつかみとろうとしてきたのだ。

【注】北中ティモール県の東部クアメナウ。通常「クアア」と略して呼ばれる。

り、信頼されるようになった。インドネシア兵が近くにいることに気づいた彼らが、「カムバック、カムバック！」とママに教えて、かくまってくれたこともあったという。ママは、品物の注文、落ち合う日時の約束、値段の交渉などを、英語に身振りや交えてこなした。「そのころは英語が上手だったのよ。だって毎日使ってたから。今はずう忘れちゃった」。

所を通過できる「越境許可証」が公式に発行されて、運用されるようになった。オエクシ側からの注文に応じて用意した品物を「ねずみの道」を通して手下に運ばせて、ママ自身は越境許可証を提示して検問所を堂々と通過してオエクシに行き、代金の受け渡しなどが済んだらまた正面から帰ってくればよかった。東ティモールでは米ドルが通貨として使われている。2009年、10年ごろが特に景気がよく、「3日間で7000ドル売り上げた」こともあった。手に入れた大量のドル紙幣の整理が間に合わず、大きな米袋にどんどん突っ込んでいったという。

だが、「2019年にコロナがやってきて、私たちのビジネスはむちゃくちゃになった」。感染対策として越境許可証は使用停止となり、オエクシへの移動自体が禁止された。同じころに、ナパン村の国境検問施設を大改修する工事も始まった。2022年には再びオエクシとの行き来ができるようになったが、ナパン検問所は現在も閉じたままである。新しい施設自体はもう完成しているが、インドネシアの現職大統領が来て正式に宣

言するまでは開業できないらしい。だから正式な手続きを踏んでナパン村からオエクシに行くには、自動車で1時間以上かけて東側をぐるりと回り、海岸にある別の検問所に行かなければならない。ディリからオエクシへの物流もある程度改善されて、

パンテマカッサルには中国人が経営する大きなお店もできた。ママたちのビジネスのうまみは、前ほど大きくはない。

「ねずみの道」のこれから

インドネシア兵とのコーディネートもできなくなった。ママ

はもう兵士たちには「協力しない」し、彼らと「チームは作らない」という。夜、兵士たちの動きによく注意しながら、荷物を運ぶ手下たちに「まだ兵士が下にいるからだめ」、「さあ今よ、早く！」と的確な指示を出す。取引地点にオエクシ側から来る相手とも携帯電話で「今のうちに早く来て！」などと細かいやりとりをして、兵士の監視をうまく逃れる。

「ドルの価値が上がると、儲かる」。インドネシアルピアとの為替レートはこまめに確認して、アタンブア（島の中央の国境に近い町）の両替屋まで持っていく。「銀行の方がレートはいいけど、新しいきれいなお札じゃないと受け付けてくれない。両替屋なら、少し破れてたり汚れてたりしても受け取ってくれる。」「今日はドルが上がってる」とわかったら、すぐに両替に行かせる。ドルが下がったときには、しまっておいて待つ。こないだは1ドルが1万5950ルピアになったから、1万1000ドルを両替したわ」。ママのビジネスは、以前ほど簡単ではなくなった。しかし、「国境には壁なんてないんだから。何も

国境の「ビジネス」

それからは「ねずみの道」を使ってオエクシへ生活用品を運ぶ「ビジネス」を始めた。「密輸」ではあるが、国境を警備するインドネシア兵には相応の取り分を与えて「コーディネーター」を済ませ、あらかじめ「許可」を得るようにした。またこれとは別に、村人たちがパスポートやビザが無くても国境検問

所を通過できる「越境許可証」が公式に発行されて、運用されるようになった。オエクシ側からの注文に応じて用意した品物を「ねずみの道」を通して手下に運ばせて、ママ自身は越境許可証を提示して検問所を堂々と通過してオエクシに行き、代金の受け渡しなどが済んだらまた正面から帰ってくればよかった。東ティモールでは米ドルが通貨として使われている。2009年、10年ごろが特に景気がよく、「3日間で7000ドル売り上げた」こともあった。手に入れた大量のドル紙幣の整理が間に合わず、大きな米袋にどんどん突っ込んでいったという。

だが、「2019年にコロナがやってきて、私たちのビジネスはむちゃくちゃになった」。感染対策として越境許可証は使用停止となり、オエクシへの移動自体が禁止された。同じころに、ナパン村の国境検問施設を大改修する工事も始まった。2022年には再びオエクシとの行き来ができるようになったが、ナパン検問所は現在も閉じたままである。新しい施設自体はもう完成しているが、インドネシアの現職大統領が来て正式に宣

言するまでは開業できないらしい。だから正式な手続きを踏んでナパン村からオエクシに行くには、自動車で1時間以上かけて東側をぐるりと回り、海岸にある別の検問所に行かなければならない。ディリからオエクシへの物流もある程度改善されて、

西ティモール見聞録

04

松村多悠子 / まつむら・たゆこ
西ティモール生活者

蜂にまじわる小話



発行させたサンバルは珍しい。Lakoat Kujawasでは定期的に発酵食のワークショップなどを開催している。

蜜蝋はティモールの特産品としてかつて主要な輸出品のひとつであり、19世紀の学者アルフレッド・R・ウォーレスは、著書『マレー諸島』の中でこう記している。「ポニーをのぞくと、チモールの唯一の輸出品はジャクダンと蜜蝋である」。今では蜜蝋を島外へ輸出することはないが、季節になると空いたベツトポトルなどに入れた蜂蜜が市場や産地の幹線道路脇で販売され島内で消費されている。一度、パートナーが蜂の巣をゴロツと塊で持って帰ってきたことがある。産地を通りかかった際に貰ったという。コンニク、エシャロット、タマリンドと炒めただけでいいらしい。クパンでも子どもに食べさせると言うので、穴から出てきた蜂の子がうごことする

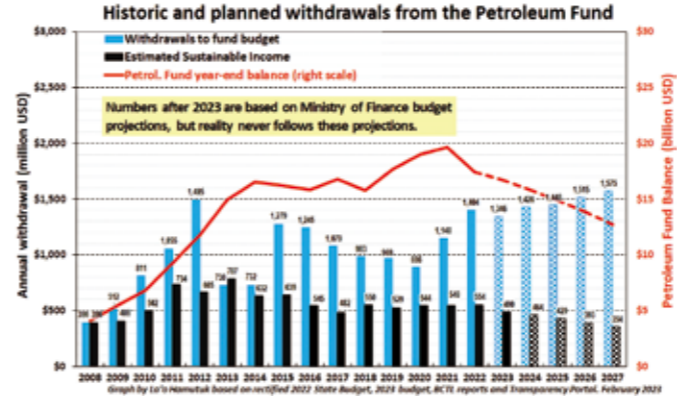
塊を炒めた。熱々を口に入れると味は悪くなく若干チーズのような風味。が、食べ進めるうちに口の中がどんどん塞がれていき、特に口の天井部分が厚みを増していく。「蜜蝋が張り付いていってるんや」と言うパートナーが「そういうえば冷ましてから食べておっちゃんか言うてた」、そういうことは先に言っておいた。口の中で固まった蜜蝋を白湯で溶かし、伸びないガムのようになった蜜蝋をゆっくりと取った。それから蜂の巣を食べる機会はないのだが、先日「蜂の巣サンバル」を食べた。西ティモールのモロという山間部にある地域で在来食文化の保全と再興のために活動する「コミュニティ Lakoat Kujawas」に滞在中、メンバーのお家で茹でたキャッサバと一緒にいただいた。「以前、口の中が蜜蝋で塞がって大失敗だった」と話すと、ここでは調理の前によく洗って蜜蝋を落とすという。その日の「蜂の巣サンバル」は採れたての蜂の巣を私の好物「発酵させた筍のサンバル」と和えたもので、とても美味しかった。次は自分でも失敗しないように、レシピを教わって帰宅した。

注) サンバルとはインドネシアなどで広く用いられる辛味調味料の総称。地域ごとに様々なサンバルがある。

石油基金への依存が続く東ティモール、国内産業の発展に大きな課題

東ティモールの首都デシリに拠点を置く市民団体La'o Hamutukは、2000年より東ティモールにおける社会開発についての監視・分析を続けています。2023年6月、同団体のマリアノ・フェレイラさんにお話を伺いました。マリアノさんが考える現在の東ティモールの社会課題をテーマにとりまとめてみました。なお、数字等は話を伺った2023年6月時点のものです。

【経済】東ティモールの経済は、主権回復から21年経ってもいまだに石油基金に頼っているということが一番の問題です。政府に対し、税収の多様化を進めなくてはならないというアドボカシーを長年続けていますが、まったく進歩がありません。



石油基金からの引き出し額(過去の実績と予測)
https://www.laohamutuk.org/econ/OJE23/220GE23.htm

せん。先日、財務省が公開した情報によると、毎年10億米ドルを石油基金から引き出しており、2022年にはその額は14億米ドルにのぼっています。財務省、世界銀行、そしてLa'o Hamutuk自身の分析では、石油基金から10億〜20億米ドルを毎年使い続けた場合、2034年には基金が枯渇してしまいます。単純にあと10年しかないのです。そうなったら、国家予算を現在の80%まで削るしかなくなり、深刻な危機に見舞われます。私たちはその問題を非常に深刻に捉えており、「La'o Hamutukとして、政府に書簡を出したり、国際機関と会議を持ちたりしていますが、小さな市民組織なので政府の政策に十分な影響を与えることができないのが現状です。」

また、東ティモールでは、若年層(17歳〜34歳の人口がほとんど)増加しており、農業や工業、その他の国内産業が発展すれば、働き手は沢山います。にもかかわらず、海外に出稼ぎに行くことが若者にとっての唯一の選択肢になってしまっています。なぜなら、政府が国内の雇用創出につながる民間セクターの状況改善の支援策にまったく力を入れていないからです。主権回復から20年以上が経っても、国内産業が全然育っていないのが現状で、いまだに主要輸出品はコーヒーだけという状況なのです。実際に、輸出額は約2000万米ドル、対して輸入額は7億米ドルという形で、非常にバランスが悪い状況が続いています。

【若者・教育】デシリには国立の大学が1校、私立の大学が5校あり、毎年多くの学生が卒業しますが、卒業後にほとんど職がないことが問題です。現状で、東ティモール国内での雇用は、公務員や小規模ビジネスの会社員など合わせて、5万人程度にとどまっています。観光や工業などが発展すればもっと雇用が生まれるのに、それができていません。実際に、大学を卒業した若者の10人に1人しか仕事をもらえないというのが肌感覚としてあ

ります。自分の国や地域を良くするための仕事に就く、という機会がそもそもないため、海外への出稼ぎという選択がなくなるとは、農業、漁業、工場労働などなので、大学で学んだことを活かせる仕事かどうかという疑問が残ります。基礎教育については、小学校から高校まで無償、と法律で定められていますが、すべての子どもたちが無料で教育を受ける機会を得られるのは良いことですが、残念ながら学校の設備も教員も質が十分でないのが問題です。

【中央集権と格差】もう一つの問題は、すべてが中央集権であること。2022年の世論調査では、地方から首都デシリへの人口流入の割合が37%にも達していることが明らかになりました。デシリの人口は30万人以上に膨れており、首都にすべてが集まっています。反対に地方では、開発も進んでおらず、若者を惹きつけるものがありません。地方においても希望がないので、多くの若者が親戚などを頼ってデシリの学校に来て、そのままデシリで家族を持ち、生まれ育った地域には戻らない、という状況につながっています。

舗の販売員など、職は限られています。かろうじて得た収入から地方の家族に仕送りを続け、しまいは家族全体をデシリに呼び寄せないデシリでの住宅問題が深刻化している一方で、地方の農地が放棄されつつあります。政府もそのことをわかっていますが、何の対策もしていません。デシリでは、煮炊き用の薪をめぐる争いなども頻発しています。こうした状況に対しては、首都デシリの状況の改善と地方の適切な開発をセットにして進める必要があります。政府のシステム自体を変えていく必要はないでしょう。実際に、権力の分散化を目的として、従来の県(District)から基礎自治体(Municipality)に移行し、その首長を住民自身が選挙で選ぶということが定められました。現在まで実現していません。まだ準備ができていない、というのが政府の見解で、結果的に中央集権が続いています。私は、各基礎自治体が、予算を策定できるようにするのが重要ではないかと考えています。治安維持などは中央集権的にやるにしても、経済、農業、教育分野は地方で担うことができるはず。【まとめ:野川未央】

注) 東ティモールとオーストラリアの間にある石油・天然ガス田の探掘ロイヤリティ収入を基金として積み立てて管理し、国会の承認に従って支出する方法をとっている。

□ APLAの本棚

『ハリーナ』編集委員が読者の皆さんにお薦めする一冊です。

4



安藤文将著『香港を耕す―農による自由と民主化運動』(岩波書店) 広州と香港をつなぐ高速鉄道建設反対運動が生み出した農の担い手に焦点を合わせ、「社会運動としての農」の可能性を追究する。 本土と香港をつなぐ高速鉄道建設反対運動に関わる人びとが生み出す「社会運動としての農」の可能性とは? 知られざる香港の農の実態を、綿密な実地調査から浮かび上がらせる快著。【箕曲在弘】

「空爆のたびに、互に殺傷し合ったり、ともに記憶が飛び散り、歴史が渦を巻いていく。救急車の響くたびに、爆発の音響が遠くへ響いていく。【松村多悠子】

アティフ・アブー・サイフ著、中野真紀子訳『ガザ日記―ジェノサイドの記録』(地平社) 11言語で世界同時緊急出版。戦場と空爆、逃避行と喪失の圧倒的記録。 仕事でガザを訪れていた著者が、日夜爆撃が続く極限状況のなかで綴り、英国の出版社に送り続けた日記。現在も続く虐殺の犠牲者は「単なる数字」ではない。その当たり前前事「無名の私たち」の記録。 【まずは出かけて、語りの生まれる場所に立ち会うこと。あのこととはわからないけれど、話はそれからだ」と著者は言う。当事者性の強い者だけが語るに適しているのではなく、その周辺にも数々の物語がある。語られずにある物語に耳を傾けに出かけたくなる。【松村多悠子】

インドネシア大統領選挙

民主主義の後退か？

津留歴史子 / つる・あきこ
グリーンコープ生活協同組合共同団体国際部

024年2月、インドネシア大統領選挙が実施され、現国防相のプラボウォ・スビアント(72歳)が得票率59%を獲得し、他2人の対立候補を大きく引き離して当選を果たした。プラボウォは09年と14年の大統領選でジョコ・ウィドド(以下ジョコウィ)を相手に敗北しており、今回3度目の挑戦でようやく大統領の座に就くことになる(正式な就任は24年10月)。

かつての人権侵害者が「庶民派大統領」の継承者に

エリート階級の出身であるプラボウォは、軍人としてそのキャリアをスタートし、独裁スハルト大統領の娘婿となった後、陸軍特殊部隊と陸軍戦略予備軍の指揮官として東ティモール、パプア、アチエの独立運動を残酷に弾圧した。スハルト政権末期には民主化運動の活動家を拉致・監禁。現在に至っても行方不明者がいる、そして華人の犠牲者を多数出したジャカルタ暴動にも関与していたと言われ、スハルト失脚後に国軍から除籍された。そ

の後数年間ヨルダンに居を移していたが、いつしかインドネシアに戻り、政財界で再び頭角をあらわすようになった。インドネシアで鉱山、パーム油、木材など多くの利権をもつ富豪である。

プラボウォのイメージは暴力と利権であり、強権体制復活を危惧する見方も根強いが、その彼を現実的な後継者としたのがジョコウィであった。10年間にわたる政権で支持率70%近くを維持してきたジョコウィは、その支持基盤を自らが所属する闘争民主党から擁立されたガンジヤール候補ではなく、プラボウォに与えたのである。庶民に寄り添う大統領としてインフォーマルセクターや小規模事業を支援する施策を積極的に打ち出し、農村や貧困地域に頻繁に足を運んで民衆の耳目を集めたが、その優しいイメージの裏で、軍・警察や地方行政に自らに忠実な人材を送り込むなど人権を乱用、情報関連法を利用して政権批判を行うNGOや個人を起訴するなど陰湿な方法で反対勢力の封じ込めを図ってきた。民主化の象徴のひとつでもあった汚職撲滅委員

会の権限も弱められているという。

民主主義の後退は争点にならず

このような非民主的な兆候を如実に現したのが今回の大統領選であった。ジョコウィは、ソロ市長であった長男のギブラン(36歳)をプラボウォとペアを組む副大統領候補とさせるために、候補者の最低年齢規定40歳について、憲法裁判所で「首長経験者においてはこの規定から除外する」という特例を認めさせた。この時、憲法裁判所の所長がジョコウィの義



プラボオウの写真と人工知能(AI)を使って作成されたイメージしたキャラクター。
<https://editorindonesia.com>

弟であったこともあり、大統領による政治の私物化だと批判の声が高まった。インドネシアの代表的知識人グナワン・モハマドは、テレビのトークショーで「ジョコウィは政治改革の恩恵を受けて大統領になったが、その意味を理解していない。インドネシア民主化のため殺害され、誘拐され、牢獄に入れられ闘った人びとを踏みにじる行為だ」と涙を流した。

しかし、それでも国民はプラボウォ、あるいはジョコウィに熱狂した。プラボウォはジョコウィの政策を継承すると強調し、強面の人相を晒さず、丸ぼちゃおじさんの可愛いアニメキャラクターとなつて若者に人気の「トコトコ」が登場した。人権侵害の首謀者という暗い過去が問われることはなかった。民主化運動の学生リーダーであり、近年は闘争民主黨員として活躍していたブディマン・スジャトミコは、かつてプラボウォ指揮下のもと弾圧され牢獄に入れられたが、今回プラボウォ支持にまわった。その理由として、「プラボウォの近くにいることで、彼の権力の暴走を監視できるから」と、あるインタビュで述べた。そして「今後大國として世界に打ち出していくインドネシアには彼のような強い指導者が必要だ」とも言ったが、これはGDP成長率5%(23年)で経済が上昇気流に乗るインドネシアで、その有権者数の半数を占める20〜30代の声を代弁するものなのかもしれない。

インドネシア・パプア州を訪問して

筑波大学・国際総合学類の海外研修に参加した皆さんに聞く

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

024年3月、APLAとカオキタ社が協力する形で筑波大学・国際総合学類の海外研修が実施され、1年生から3年生までの7名の学生さんがインドネシア・パプア州を訪問しました。パプアでの滞在10日間、うち5泊6日はカオキタ産地のブラップ村に滞在するという充実のプログラムのなかで、特に印象に残っていることやパプア訪問前後での自身の変化について、参加者の皆さんに話を聞きました。

やっぱりトイレ!?

まずは「トイレの使い方(和式に似た便器なので壁の方を向いて座ると思っていたが、穴の真上にお尻がくるように壁を背にしてしゃがむ)を滞在後半で初めて知った時の衝撃」「水浴びは基本的に川です」と事前に聞いていてドキドキしていたけれど、実際に体験してみたらずから大丈夫だった」「明け方3時頃に響き渡る鶏の鳴き声で目が覚めて眠れなかった」といった日本とは異なる暮らしにまつわることも多く挙げられました。また「カオキタ農園を



カオキタ社代表のハンスさん(写真一番左)とカフェ担当のリファさん(写真中央)と一緒に。左から田中洸大さん、平井慧人さん、平須賀美里さん、津田朔さん、江幡さくらさん、松本英愛さん、高羽玲理さん。

訪問した際に子どもたちが裸足で駆け回っていた「子どもが木登りをしてフルーツをとってくれた」「小学生が鶏の捌き方を教えてくれた」など、村の子どもたちの生きる力の強さも印象的だったよう

す。

ブラップ村での滞在以外にも、ジャヤプラ市内にあるカオキタ社のカフェで1日職業体験をしたり、パプアニューギニアとの国境近くに広がる島外からの移民が多く暮らすいわゆる移住村を訪問したりもしました。そうしたなかで印象的だったことを聞いたところ、「村でとれたカオキタからチョコレートが作られる過程を見学できてよかった」というようなカオキタに関する感想以外に、「移住村で、パプア人の物売りの女性たちは道路端で座り込んで売っているのに対し、移

異なる文化・価値観と触れ合って

では、パプアを訪問して、どんな変化があったのでしょうか。平井さんは「パプアではほとんどのモノが剥き出しで売られていたけれど、問題なく食べることができた。これまでほとんど意識していなかったけれど、帰国後にプラスチックなどの過剰包装があまりに多すぎることに気がなるように

なつた。『発展』が必ずしもいいこととは限らない」と語ってくれました。滞在中も帰国後も、盛り上がったトイレの話に引きつけて「これまで空港などで洋式の便座に『和式トイレのように』乗らないで」という注意書きを見て、こんなことする人がいるわけがない、と不思議に思っていたけれど、村で生活してみても、そのトイレしか知らない人が初めて洋式トイレに遭遇したらきつと(注意書きで示しているように)乗るな、と思った。おかげで、自分が知らない文化・見落としている価値がたくさんあるということに気づけた」と津田さん。また、カオキタ産地の訪問やチョコレート製造現場の見学という体験を通じて「帰国してからネットで商品を見ても、これはどうやって作られて、どうやって手元に届くのかに気がなるようになった」と語ってくれたのは、江幡さんです。

他にも、パプアの皆さんとの出会いと共に過ごした時間を通じて、開発についての授業の際に出会った人たちの顔が浮かぶようになった、以前の自分が持っていた文化や環境の異なる地域に対する印象・向き合い方が大きく変わった、自分が当たり前だと思っていた日本でのライフスタイルや習慣について振り返るきっかけを得た、という話も複数ありました。まさに人と人が出会う交流の力! 今後もAPLAでは様々な交流の場を創っていききたいと思います。

工

コシユリンブは、インドネシアで環境に配慮した粗放養殖で育てられたブラックタイガーです。稚エビ放流後は、人工飼料、抗生物質を使用せずにエビを育てるため、プランクトンなどの自然のエサが発生しやすいように養殖池の土づくりや、水の塩分濃度の調整など、生産者がやるべきことがたくさんあります。生産者にエコシユリンブ養殖の難しさを聞くと、ほぼ全員が口を揃えて、「昔に比べてブラックタイガーの稚エビの入手が難しくなってきた」と言います。

なぜそのような問題が生じているのか。生産者や、エコシユリンブを輸出しているオルター・トレード・インドネシア社（ATINA）は、どのようにこの課題を解決しようとしているのか。それらについてご説明します。

ブラックタイガーの稚エビが減少

エコシユリンブの生産者は、ハッチエリー（稚エビの孵化場）で生産されたブラックタイガーの稚エビを購入して、養殖池に放流をしています。しかし、近年ではブラックタイガーの稚エビを生産するハッチエリーが減少しており、必要な時期に必要な量の稚エビを確保することが難しくなっています。ブラックタイガーの稚エビが減少し

門を開けて養殖池に水を入れます。逆に満潮時は海から河川に水が流れ込むため、塩分濃度が低い時はこの時に水門を開けます。

しかし、近年では気候変動の影響もあり、雨季でも雨が降らない、乾季が短い、雨季に予想以上の大雨が続くなどといった異常気象が続いており、養殖池の塩分濃度の調整が難しくなっています。そのため塩分濃度の変化に強いバナメイの方が養殖しやすいです。

品質の良い稚エビを確保するための取り組み

ブラックタイガーの稚エビの入手が難しくなっている状況を改善するために、ATINAは小規模ハッチエリーとエコシユリンブ生産者をつなぐ活動をしています。今まではハッチエリーの生産時期と生産者の稚エビ放流時期が合わないという問題がありました。ATINAが間に入って調整することで、ハッチエリーは安心してブラックタイガーの稚エビを生産でき、生産者は放流時期に合わせて稚エビを入手することができる仕組みが構築されつつあります。

また、稚エビの品質が悪くなっている理由のひとつに出荷される稚エビの生育期間が短くなっていることが挙げられます。まだ若い稚エビを養殖池に

減少するブラックタイガー ——稚エビ減少に直面する産地の対応

黒岩竜太 / くろいわ・りゅうた
（株）オルター・トレード・ジャパン 商品部



シドアルジョ県のイルルさんの池での収穫の様子。

ているのは、バナメイエビの養殖が拡大したためです。1983年に台湾で稚エビを大量生産する技術が確立され、インドネシアにも集約型のエビ養殖が広がりました。当時はブラックタイガーの養殖が主流でしたが、同品種に比べて塩分濃度の変化や病気に強く、池の底を歩き回るブラックタイガーと違い水中を泳ぎ回るので養殖密度が高く効率が良いなどの理由からバナメイの

養殖が増え、2007年には養殖生産量はブラックタイガーを超え、インドネシアで一番生産されているエビ品種になりました。

エビを効率的に大量養殖する集約型養殖池がバナメイにシフトしたこと、規模の大きなハッチエリーもバナメイの稚エビ生産へとシフトしていきました。その結果、現在もブラックタイガーの稚エビを生産しているハッチ

集約型養殖では、ポンプで海水や淡水を引くことで塩分濃度を調整しますが、汽水域に広がる粗放養殖では潮の満ち引きを利用して塩分濃度を調整します。干潮時は川の水が多く流れ込むため、塩分濃度が高い時は干潮時に水

放流してしまうと、生存率が低くなり、収穫量が減ってしまいます。



バケツの中を元気に泳ぐ稚エビ。

この課題を解決するために、東ジャワの一部の生産者は、養殖池に放流する前に稚エビの養育場でさらに10日間ほど育ててから放流する方法に変えました。稚エビを大きくしてから養殖池に放流することで、生存率が高まり収穫量も増えたとのことです。東ジャワ州グレンシック県の生産者であるロシッドさんは、自分用だけでなく、大きく育てた稚エビを他の生産者にも販売しています。

大きく育った稚エビは水の流れに逆らい、元気に泳いでいました。

ATINAは、南スラウエシ州ピンラン県でもエコシユリンブ生産者と稚エビの養育場の取り組みを始めており、品質の良い稚エビを入手できる仕組みの構築を目指しています。

エコシユリンブの民衆交易が始まって30年以上経ち、2代目の生産者も増えてきています。一方で、外部環境の変化を受けて、生産者たちは様々な課題に直面しています。これからもエコシユリンブ養殖を継続していけるよう、生産者とATINAの挑戦は続きます。

こんなことが
あったんです！
スタッフが語る出張こぼれ話

初めてのランブータン

菅野桂史 / すがの・けいし
（株）オルター・トレード・ジャパン 商品部



入社して早2年、2024年3月末に初めてインドネシア・パプア州のカカオ産地を訪問しました。パプアは1年中暑い熱帯気候で、乾季・雨季はハッキリしていません。日本よりも日差しが強く、カカオの畑（森）を巡るときも、パプアの人たちは暑さに慣れっこですが、私は汗ダラダラで飲料水を手放せませんでした。

現地では出会った印象深い食べものをご紹介します。パプアといえばサゴヤシから作るモチ状の「パベダ」という伝統料理が有名ですが、今回たくさん食べたものが「ランブータン」という果物です。東南アジア原産の果物で、自然豊かなパプアでもたくさん生えています。家の前に木材で小さな無人販売所のようなカウンターを作り、ランブータンやドリアン、ピンロウなどを売っている家もたくさんありました。今回初めてランブータンを知ったのですが、その毛むくじらの見た目からマレー語で髪の毛を意味する「rambut」が名前の由来だそうです。ライチのような甘酸っぱさとみずみずしさがあります。

カカオ豆を集めてくれるカカオキタ社と、昨年現地で立ち上がった生産者組合の皆さんとのカカオ豆の買い付けに同行させてもらった際に、途中で立ち寄った生産者のお庭から採れたランブータンを買って、教えてもらった皮のむき方になってひたすら食べました。手軽にチュルッと食べられて、なおかつヘルシーという、まさにおやつにもってこいの果物です。みんなでランブータンを味わいながら、カカオ豆の買い付けに回ったことが私には新鮮で貴重な体験となりました。



インドネシアの右も左もわからないまま、パプアについてもほとんど何も知らないまま、ただただ「先生にくっついて旅ができるなら…」と、大学を卒業する春休みに足を運んだインドネシアのパプア。早いものであれから18年もの月日が流れ、去る3月には現役の大学生の引率の立場で彼の地を訪問した。ジャヤプラの空港で、乗り継ぎのジャカルタで、「帰りたくないなあ…」(カカオ産地の)ブラップ村に戻りたいなあ…」、そうつぶやいていた大学生の皆さん。パプアで出逢った人たちとの時間やパプアの豊かな自然が与えてくれたものを忘れずに、それぞれの道を歩んでいってもらえたら嬉しい。(野川)

初めてティモール島を訪れたのは2007年7月。西端の町クバンから東端の町のロスパロスとその先まで陸路で横断し、ボランティア活動や旅を通してたくさんの東西ティモール人と出会った。別れを告げれば、東側の人に西側の国境近くで会い、拍子抜けしたら、パスポートを使っていないと言う。「家族に会いに」という穏やかな理由と態度、対して「不法入国」のイメージがコントラストで、衝撃だった。この時の経験が私をティモール島に結びつけて離さない。植民地時代に引かれた線が分けるものもあれば、その線を当たり前に飛び越える人びとがいる。この世界で様々な形で今なお植民地主義に対し、彼ら東西ティモール人の生き方から対抗するしなやかさを学べるのではないか、と思う。(松村)

ハリーナ HALINA

2024年8月号 vol.02-no.53
2024年8月1日発行

【編集者】
野川未央
松村多悠子
【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
(tel.) 03-5273-8160
(fax.) 03-5273-8667
(e-mail) info@apla.jp
(URL) https://www.apla.jp

【印刷】
有限会社だいもん印刷

事務局だより

事務局の動き (2024年1月～2024年6月)

1月 6日～10日	ぼこぼこバナナプロジェクト(PBP)メンバーがフィリピン・ネグロスを訪問しました。
2月 1日	東京学芸大学附属高等学校の校外学習を受け入れました。
2月 2日	グリーンコープかごしまfromネグロスセミナーで講師を務めました。
2月 3日	バルシステム神奈川「ハートカフェ」に出展しました。
2月 9日	バルシステム東京Peace Night Cafe「カカオ産地から紐解いたチョコレートの不都合な真実」で講師を務めました。
2月 19日～25日	東ティモールに出張しました。
2月 25日	イベント「明日の食べものがくるところ～オリーブオイルから見るパレスチナ、イスラエル、三鷹～」でトークを担当しました。
2月 27日～3月 2日	フィリピン・ネグロス出張、2月29日にはKF-RCの理事会に参加しました。
3月 11日～22日	筑波大学の海外研修(インドネシア・パプア)に同行しました。
3月 13日	明海学童クラブ(千葉県浦安市)を訪問し、子どもたちに聞き取りをしました。
3月 16日	「CLEANING DAY GREEN SPRINGS with TOKYO エシカルマルシェ」(東京都立川市)に出店しました。
4月 13日、14日	アーステイ東京2024に出店しました。
4月 19日	早稲田大学で講義しました。
4月 21日	理事会を開催しました。
4月 24日	「パレスチナのオリーブオイルを知って食べて楽しむNight」を開催しました。
5月 24日	「規格外バラコンバナナを知って食べて楽しむNight」を開催しました。
5月 27日	立教大学で講義しました。
5月 29日～6月 8日	フィリピン・ネグロスからエリマー・トグハップさん、北部ルソンからギルバート・ボン・II・クミラさんが来日しました。
6月 1日	第17回総会ならびに会員交流会を開催しました。
6月 2日	「すべーすはちのこ祭」(東京都三鷹市)に出店しました。
6月 9日	「2024八王子環境フェスティバル」に出店しました。
6月 20日	一般社団法人BMW技術協会の第13回定時総会に出席しました。
6月 21日	「パプア州のカカオを知って食べて楽しむNight」を開催しました。
6月 22日	「わたしのお店」(長野県上田市)に出店しました。
6月 25日	筑波大学で講義しました。
6月 27日	WE21ジャパン相模原主催のパレスチナ講座にATJ広報室とともに講師として参加しました。
6月 28日	東洋大学で講義しました。
6月 30日	「世界のバナナスウィーツフェス」を「おとなりカフェ」と共催しました。

事務局からお知らせ

バラコンバナナ・規格外バラコンバナナを伝える絵本プロジェクト
バラコンバナナの背景やどうしても生まれてしまう規格外バナナについて伝える絵本を制作します。その制作資金を捻出するために、この夏、クラウドファンディングに挑戦します。8月7日の「バナナの日」から開始予定ですので、応援どうぞよろしくお願いたします。
<https://camp-fire.jp/projects/view/764990>



ぼこぼこバナナプロジェクトでは、公開ミーティングを毎月1回開催しています。
公開ミーティングに参加希望の方は、事務局・福島(tomoko@apla.jp)までご連絡ください。Zoom情報をお届けします。

代表理事からのご挨拶

日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の活動を引き続き形で、NPO法人としてAPLAが設立してから、今年で16年が経ちました。2024年6月に開催された第17回総会で新役員体制が承認され、新代表理事に箕曲在弘みまのひろしひろさんが就任しました。

このたび代表理事に選出されました箕曲在弘と申します。本業は、文化人類学を専門とする大学教員です。大学院生の頃から、東南アジアのラオスのコーヒー農家のもとで継続的にフィールドワークを行い、フェアトレードの社会的・経済的影響について探究してきました。ラオスのフィールドでは、A



TJにコーヒーを販売する民衆交易のパートナー農家さんにお世話になっていた関係で、ATJのラオスコヒー事業にもかわるようになり、2010年から4年ほど、この事業のアドバイザーをつとめてきました。一方で、ATJの創業者である堀田正彦さんの紹介により、11年にはATJの評議員に、13年には理事に就任して、現在に至ります。

16年には、APLAの活動としてフィリピン(ネグロス)、東ティモール、ラオスの若手農家の交流プロジェクトを企画・運営しました。このプロジェクトでは、3か国の農家が3つの地域を1年間で訪問しあい、それぞれが抱える課題を共有し、解決策を模索しました。APLAは、JCNC時代よ

り培ってきたネグロス島での活動の経験を、アジアの他の地域に広げていくことを目的に08年に設立された団体です。その意味で、この3か国交流プロジェクトは、APLAの当初の狙いに沿うものであったと考えます。APLAは活動開始から10年を経て、世代交代が喫緊の課題となっていました。コロナ禍の20年8月、共同代表としてAPLAを中心的に支えてきた秋山眞兄さんが急逝され、よりいっそう次の世代にバトンを渡す必要性が迫りました。こうした背景から共同代表の疋田美津子さんと市橋秀夫さんよりご推薦いただき、若輩者ながら私が引き継ぐことになった次第です。

09年にフィリピンのネグロス島にカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFR)が開校してから、すでに15年が経ちました。24年6月1日に開催された総会において、KFRCの最初の卒業生で現在はKFRCの事務局長を務めるエムエムさんは、APLA会員の前で、KFRCのこの15年の成果について話しました。ネグロス島では、多くのKFRCの卒業生が自活しており、彼らのネットワークが築かれています。

理事会でKFRCの運営にまつわる紆余曲折を聞いてきた私としては、それがいかに難しいかを少しは理解しているつもりです。APLAはこれからも、フィリピンだけでなく、東ティモールやインドネシア、パレスチナ、日本の福島の農家さんたちと、それぞれの立場を超えて交流しながら、この時代にあったオルタナティブな世界とは何かを模索していきます。「コトからモノへ、モノからコトへ」の精神を忘れずに、APLAはこれからも進み続けま



エムエムさんも若手農家の交流プロジェクトに参加した一人。

撮っておきアジア take a shot of Asia.

撮影場所

台湾

Republic of China (Taiwan)

[撮影者]

吉澤真満子 / よしざわ・まみこ
 (株)オルター・トレード・ジャパン商品部



01	02
03	
04	05

01.....台湾は外食する人が多いと言われています。街のあちこちに自助餐というビュッフェ式の食堂があり、我が家の近所の店では毎日約50種類以上のお惣菜(定番と日替わり)があり、好きなものを選ぶようになっています。重量で計算してお会計。端数は、レジのおばさんの裁量でおまけてもらえる時も!

02.....台湾では集合住宅内にごみ捨て場がある家とない家があります。ない場合は、街を巡回しているごみ回収トラックまで自分たちで持っていくます。日本の灯油販売のように音楽が聞こえてくるので、それが合図です。

03.....中国文化圏では公園で太極拳をしているイメージがあったのですが、ここではエアロビや社交ダンスが繰り広げられていました。暑いので、木陰に集まるのも納得です。

04.....台北市から北に約30分行くと、淡水河の河口に開けた港町・淡水があります。河と海が見えて台北市内とはまた違った景色で、地元の人たちの観光地として賑わっています。

05.....台湾で大事にされている節句の一つである端午節(旧暦の5月5日)に開催されるドラゴンボートレース。龍の形をしたボートを太鼓の音に合わせて漕いでタイムを競います。



ハリーナ HALINA

2024年8月号 vol.02-no.53 2024年8月1日発行 頒価 300円(税込)

【編集・発行】

特定非営利活動法人 APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F
 <tel.> 03-5273-8160 <fax.> 03-5273-8667 <e-mail> info@apla.jp

<URL> <https://www.apla.jp>

APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、サポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・お申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

